Osaka University Knowledge Archive

Title	安部公房のクレオール性 : ＜引揚者＞から＜亡命者的＞立場へ
Author(s)	朴, 利鎭
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58538
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【5】

氏　　名	朴（パク）　利（イ）　鎭（ジン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４１５４　号
学位授与年月日	平成22年9月22日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	安部公房のクレオール性　―<引揚者>から<亡命者的>立場へ―
論　文　審　査　委　員	（主査） 准教授　橋本　順光 （副査） 教　授　出原　隆俊　　言語文化研究科教授　中　　直一

論文内容の要旨

本論文は、安部公房の著作にみられる自己認識に注目し、その「引揚者」から「亡命者的」立場への変化にクレオール性を読みとろうとするものである。

第一章は、「外地引揚派」を自称した五木寛之の小説や引揚者の体験記を参照しながら、安部の満州体験を考察している。引揚者という立場からもたらされた異邦人という視座が、小説の中に形象化されていることを、『終わりし道の標べに』(1948)や『けものたちは故郷をめざす』(1957)などに言及しながら論じられる。

第二章では、初期作品群を中心に、満州体験が二重性をもった「植民地体験」へと変化することに注目している。満州での日本と戦後の日本とに分裂した二重性が、「憎悪」(1948)や「異端者の告白」(1948)に指摘できるのに対して、「飢えた皮膚」(1951)や「変形の記録」(1954)には、満州での中国人を戦後占領化の日本人に二重写しする視座へと変化したことを指摘し、それゆえ、「探偵と彼」(1956)での満州への郷愁が屈折したものになっているのではないかという推測がなされる。

第三章では、1960年代の作品を中心に、「植民地体験」が、シュールレアリスムにおけるデペイズマン技法と融合していく過程が述べられる。具体例として、満州からの引揚者という違和感が、『人魚伝』(1962)において、人魚によってもたらされる異化作用と重なりあうことが指摘される。一方で「カーブの向こう」(1966)など1960年代の作品にみる記憶喪失の主題に、安部の自己認識の投影を読みとろうとする。

第四章では、安部の帰属への拒否が内的亡命という形で結実することが論じられる。『箱男』(1973)における箱に閉じこめられる男の姿に、「都市への回路」(1978)で安部が語る追放としての引揚体験と、「内的亡命の文学」(1978)で自己規定される亡命者の原型が見いだされる。

第五章では、安部がガルシア＝マルケスの『百年の孤独』において読みこんだものの意味が論じられる。安部は『百年の孤独』を滅びゆく共同体を描いた亡命者文学と評価する一方で、シュールレアリスムやカフカの影を読みとるなど、安部自身の小説との共通性を実感したことが指摘される。こうして満州からの引揚体験が、『百年の孤独』を通して亡命者の世界文学として実感されてゆく過程に、クレオール文学としての可能性を指摘して論文は閉じられる。

論文審査の結果の要旨

安部公房の小説を、作者の満州体験と作者が受容した海外の思潮とを、200ページ（400字換算約600枚）以上にわたって幅広く調査しながら、クレオール性という一点から読み解こうという試みは十分に評価できる。安部の満州時代での同級生に聞き取り調査を行うような実地の調査、そして文献調査をもとに、安部の小説における図像をシュールレアリスム絵画と比較してデペイズマン技法の共通性を指摘するジャンル越境性、そして安部によるガルシア＝マルケスの小説の受容論など、比較文学の博士論文としての基準は十分に満たしているといえるだろう。

しかしながら、それらの作者ないし周辺事実に関する調査が、やや安易に作品分析に当てはめられ、十分な本文分析がなされていない点について、いくつか疑問が呈された。作者の経歴調査にしても、自筆年譜に依存するだけでは不十分であるほか、デペイズマンについての指摘やカフカとの比較は、先行研究との差異が十分に出せているとは言い難く、鍵となるクレオール性にしても、安部自身による特異なクレオール言語への関心や内的亡命との関連は、十分に整理されているとは言い難いとの評言があった。

とはいうものの、安部公房の作品を異種混交性という点において、満州での引き揚げから、ガルシア＝マルケスへの共感までの三十年を射程におさめて整理してみせた力業は、今後の展開を期待させるものであり、本論文で言及されているように、安部のさらに他の小説がどのように分析され、読み替えられるかについては、審査員一同一致して期待が寄せられた。以上のことを鑑み、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい十分な価値を有するものと認定する。